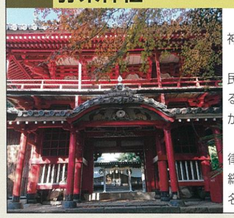
16 弥栄神社

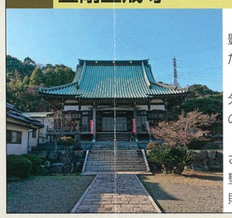


奈良時代の771年、岩屋寺の境内に、京都祇園社(八坂神社)の神を迎えて祇園社が創立されたといわれている。

祭神は「素戔嗚尊・大国主命・稲田姫命」の三神で、庶民の疫病を退治し、地域の繁栄を守る神として祭られている。国府時代から大友時代を通して栄えた祇園社であったが、戦国期の1586年、祇園川原の戦いで焼失してしまう。

荒廃した祇園社は1618年、時の府内藩主・竹中重義が律院村西山(現在地)に移して再建し、里郷(南大分)の氏神総鎮守とした。明治4年(1871年)、祇園社は弥栄神社と名称変更された。

17 金剛宝戒寺

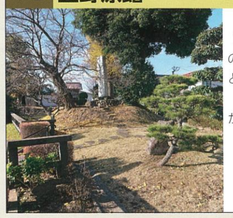


奈良時代の727年に聖武天皇によって、当時の豊後国府近くの五丁津留(古国府花園)に創建されたといわれている。

その後1307年、大友氏6代貞宗が、度重なる大分川の氾濫で荒廃していた金剛宝戒寺を、西大寺の僧幸尊を招いて現在の上野丘に移し再建した。

宝戒寺には、平成3年に国の重要文化財に指定された大日如来座像や、木造釈迦如来立像、木造聖徳太子立像、木造不動明王像などの県指定文化財が安置されている。

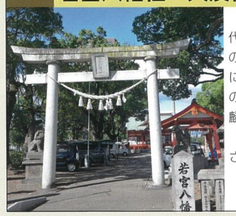
18 上野原館



府内大友館と共に大友氏のもう一つの拠点、「上野原館」があった。今も一部に館を守るための大規模な堀跡や、土塁が残り防御性の高い館として今に伝えられている。

いつ頃建設されたかは不明であり、発掘調査が待たれる。

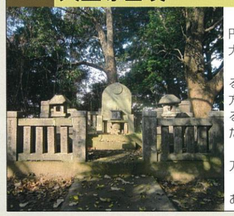
19 若宮八幡社・大友神社



若宮八幡社は、建久7年(1196年)大友氏初代の能直が、守護として豊後に入国した際、鎌倉の鶴岡八幡宮を勧請して古河津留に創建した。後に現在地近くに奉還されたと伝えられている。その由来から大友氏の氏神として崇敬厚く、大友宗麟、義統も社殿を修営している。

社殿脇(南側)に、大友氏初代・能直を祀る小さな大友神社が立っている。

20 大臣塚古墳



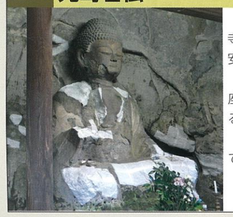
前方後円墳で前方部は防災工事のため消失し後円部が残っており、全長60メートルほどである。旧大分川がすぐ下を流れていた。

大臣塚といわれる由来は、百合若大臣の伝説にある。モデルは蒙古との戦で現地最高指揮官(鎮西東方奉行)だった大友三代頼泰ではないかと想定される。ただ実際の被葬者は、5世紀ごろに活躍していた海上交通に精通した豪族と思われる。

1635年の大風で松の木が倒れた時に、人骨、太刀、甲冑が出土した。

また、傍らには時の領主「白根野吉明」の記念碑がある。

21 元町石仏



上野台地東端の崖に刻まれている石仏で、岩屋寺石仏と同じく宇佐密教文化の影響を受けた平安時代後期の作といわれている。

原形をとどめている石仏は薬師如来坐像で、台座からの高さが5メートルという大きな石仏である。

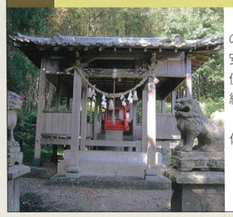
土地の人は「薬師さま」と呼び「お救い仏」として朝夕にお参りしている。

国指定史跡である。

22 円寿寺

豊後国府の鎮護寺として770年ごろ古国府岩屋寺(字名)一帯に建てられた石(岩)屋寺が前身の古刹である。1304年に大友五代貞親が比叡山より道勇和尚を招いて総社山と名付けて中興する。さらに1307年、大友六代貞宗が岩屋寺を六坊の現在地に移し、総社山円寿寺と改める。その後円寿寺は大友氏歴代の祈祷寺となった。また江戸時代でも歴代藩主の庇護を受けた。江戸初期、豊後に流された徳川家康の孫松平忠直公はしばしば寺を訪れ、当時の住職である覚仁和尚と交流を深めたという。

23 天満社（旭町）



過去に拝殿の裏側から石棺が掘り出された。蓋の部分は大変大きな石で、神社の大きな木の側に安置され、箱の部分の石は、初瀬井路の「大橋」に使用された。この事から旭町の天満社は5～6世紀の円墳の跡に建築されたものと思われる。

神社は古墳の跡に建てられることがあるが、宇佐神宮の本殿もその一つといわれている。

24 宿善神社

旭町の丘の中腹にある小さなお社。

明治初年、百姓一揆があった際旭町一帯が焼き打ちされた。町は復興費に充てるため、荒廃していた宿善さまの社地を個人に売った。ところが買った人の家に不幸が生じた。また、石段を壊して、そこに家を建てた人も不幸に見舞われるなど不吉が続いた。これは宿善さまの祟りに違いないというので、町内の有志の世話で宿善神社を再建したという因縁話がある。

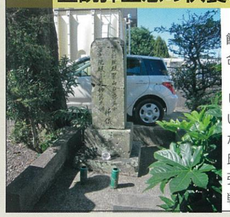
25 鯉飼場

大正4年に鯉の養殖をするために造られた元県水産試験場(淡水)の養魚場で、プールほどの大きさの池が6面あった。

養殖の鯉は奈良県から買い入れた。そして、技師の稲田久吉さんが人工ふ化を行い、幼魚を農家に配り水田養鯉を指導した。

最盛期の昭和5年頃には40万匹もの稚魚を販売していた。

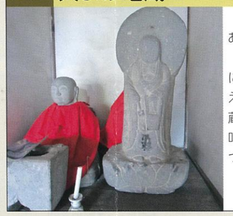
26 豊饒弾正忠の供養塔



文政13年(1830年)建立、大友19代家臣豊饒弾正忠、慶長5年(1600年)9月13日石垣原合戦討死、高祖安部宗注と刻まれている。

徳川家康方の東軍と石田三成方の西軍が激突した1600年の関ヶ原の合戦に伴って、西軍についた大友吉統が東軍の黒田如水軍らと戦ったのが別府石垣原合戦であった。旧大友家臣の豊饒氏は、この戦に参戦し活躍するも討死する。豊饒弾正忠の供養塔は、大友一族豊饒氏と、石垣原合戦との関係を伝える貴重な史跡である。

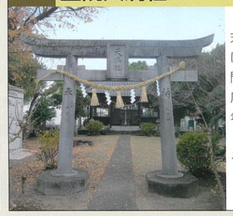
27 火よけ地蔵



右手に柄杓、左手に手桶を持った珍しい地蔵である。

言い伝えでは、村で真夜中に火事があった時に、「火事だー、火事だー」と大きな叫び声が聞こえ、村人はすぐに火を消しとめた。次の日にお地蔵さまを見ると汗びっしょりかいている。昨夜の叫び声はお地蔵さまだと分かった村人は、お堂をつくり大切に安置したという。

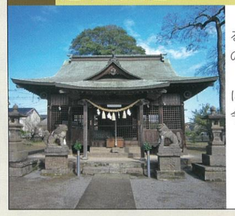
28 豊饒天満社



創建された時代は不詳といわれているが、戦国末期から江戸時代初期の頃とも考えられる。社地は2回遷宮されている。最初は現在の県立病院正門付近にあり、次に現在の大分信用金庫畑中支店の向かい側に移った。現在の天満社は昭和52年に新築遷宮された。

また、境内には二体の六地蔵が安置されている。

29 畑中天満社



天満社の創建された時期は不詳とのことであるが、府内藩記録では、享保17年(1732年)の頃に畑中天満社の社名が初見している。

当初、敷地は狭かったようであるが、大正4年に秦ユフさんという方が隣接の土地を寄贈され、今の600坪という広い敷地となっている。

現在の社殿は大正6年に再建されている。

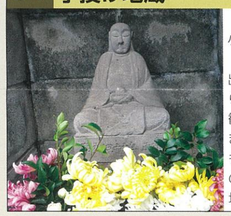
30 十輪寺

現在畑中公民館がある場所が転光山十輪寺で、この公民館の奥の一室が本堂となっていて地蔵菩薩が祭られている。

寺伝では、慶長元年(1596年)、僧悦慶が延命地蔵菩薩を刻んでお堂に安置し、別府万松寺の第2世業老が十輪庵と称して開基、畑中村の庄屋秦氏が堂宇を増築して剃髪、一法と改め第2世を嗣いだという。

境内には「五輪塔」「役行者」「六地蔵」など南大分で最多の石造物があり、歴史を伺うことができる。

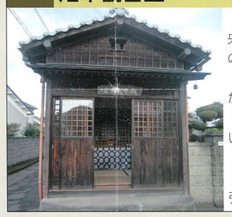
31 子授け地蔵



畑中町内の民家の脇に古くから祭られている小さなお地蔵さま。

この家の祖先には、子どもが出来ては亡くなり出来ては亡くなりして、どうしても子どもが授からなかった。このことを知った近くのお坊さんの勧めで、お地蔵さまを奉納してお祭りしたところ、まず男の子ができ、次に女の子ができて、二人ともすくすく成長した。これ以来この家では子どもの守り本尊として、常にお花を絶やすことなく、お地蔵さまを祭り続けている。

32 畑中観音堂



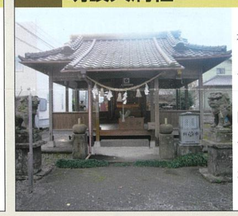
お堂は民家の入口に建てられており、中に入ると中央にお観音さま、左にお大師さま、右手にお不動さまの三体が安置されている。

明治38年ごろ、お堂を建て替えたとき、永興の臨済寺から観音さまをもらい受けて納めたとのことである。

毎月17日に近所の人が集まり、お経をあげているという。

また、畑中ではこの観音堂を含め、いたるところで「おせったい」が行われており、ふるさとの伝統文化を引き継いでいる。

33 明磧天満社



天満社の創建時期は不詳であるが、かつての神木(杉の大木)の年輪から戦国期の永禄年間(1558年～1570年)頃ではないかといわれている。

奥小路村の氏神様・天満社の所在地は、当初旧道沿い南向きであったが、明磧橋の架け替えや土手の改修で西向きになった。さらに昭和37年、210号線明磧橋が高架されて旧宮地を移転拡張し、北向きとなって現在に至っている。

34 明磧観音堂

昭和38年の国道210号線の改修工事で現在の場所に移転された。由来書によると、創建は不詳だが、長安山悟真寺(大石町)の末寺と記録にあるという。本尊は阿弥陀如来である。

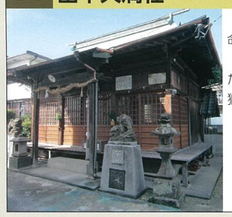
なお、明磧観音堂は大分四国第一二番礼所となっている。

35 勝音院

勝音院は昔、来迎寺(坊ヶ小路)の支院として立派な堂宇を持っていたということだが、今は無住の庵寺となっている。

当院の横にあるお地蔵さまは牛馬の疾病除けの霊験あらとして住民の崇敬を集めてきた。「火焼地蔵」と称されるのは毎年盆の8月16日の夜にお地蔵さまを焼かないと牛馬が怪我をしたり病気になったりするといういわれからである。土地の老人の子どもの頃には、ムッカラを家々から持ち寄って焼いていた。お地蔵さまは焼き立てられるので元のお姿はなく、今は50センチばかりの真っ黒な石の塊となっている。

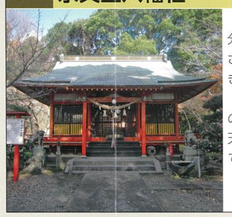
36 田中天満社



天明4年(1784年)創建。菅原道真と金山彦命の二神を祭神とする。

昭和13年に火災で焼失。翌14年に新築された。また、昭和30年には有志によって社前に唐獅子が奉献された。

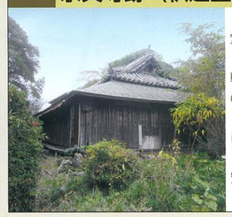
37 永興正八幡社



永興正八幡社は、鹿児島の宮内正八幡宮より分祀されたものであり、永興・竹の上村の鎮守とされている。当村の古澤、鷲尾氏は勧請の時に付き従ってきたといわれている。

現在の神殿・拝殿は昭和8年頃改築されたものである。108の石段があり眺望が良い。また、天満社、城南神社と三社を拝している珍しい神社である。

38 永興寺跡（釈迦堂）

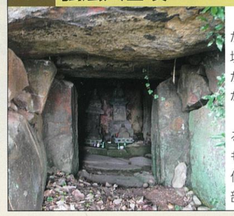


長湯山永興寺は、国分寺に劣らない規模で釈迦堂をはじめ七堂伽藍を誇ったと伝えられている。

奈良・平安・鎌倉期と栄えた永興寺であったが、戦国期の天正14年(1586年)大友・島津合戦の兵火で焼け落ちてしまう。

徳川時代の享保10年(1726年)に世話人によって釈迦堂が建立される。その後、嘉永6年(1853年)の大地震によって壊れるが、幕末の安政期に再建され現在に至っている。

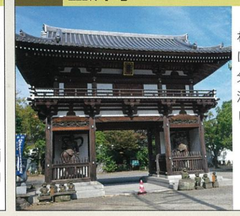
39 弘法穴古墳



上野から太平寺、永興、片面へと続く丘陵には、かつて一帯を統治した豪族のものと思われる古墳がいくつもあったといわれる。しかし、残念ながら現在ではほとんどが破壊されており、わずかな古墳しか残っていない。

弘法穴古墳は永興で一つだけ残った古墳である。おおよそ5世紀から7世紀にかけて造られたものと推定される。石室は南面して開口し、羨門付近は発掘の際破壊されたらしく分明しない。内部は羨道と玄室よりなっている。

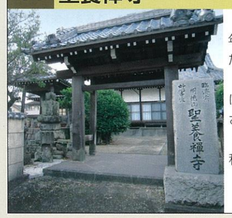
40 臨済寺



金龍山臨済寺は、江戸中期に尼ケ瀬に建立された大法院が前身で、明治5年に比叡山延暦寺に帰属し天台宗に転じた。当時、尼ケ瀬は度々大分川の洪水で難を受けていた地であったため、明治24年、寺を永興の現在地に移し臨済寺と改称した。

毎年行われる「火渡り」が有名である。

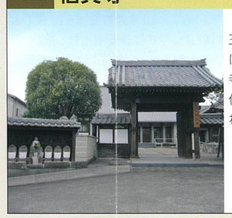
41 聖養禅寺



明徳山聖養禅寺は文明年間(1469～1487年)に建立され、万寿寺の徳興真聖禅師が開山したといわれる。

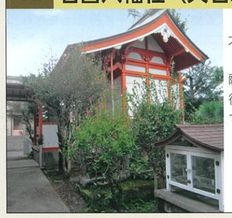
創建当初は現在のこども女性センターの辺りに、荏隈の大友家臣・佐藤三河守が敷地を寄進され建立したといわれている。その後、寛永年間(1624～1644年)金叟座元禅師が現在地に移して再建したという。

42 悟真寺



雑城雑誌には慶長元年(1596年)に、上村の三宮賀右衛門が建立したとある。来迎寺由緒書には慶長19年(1614年)の建立で開山は来迎寺第八世興虎上人となっている。三宮氏は江戸時代の上村組大庄屋をつとめており、寺の建立に関わったものと思われる。

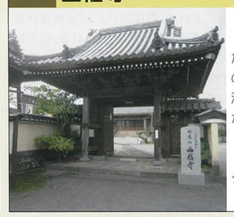
43 若宮八幡社（大石町）



祭神は応神天皇、仁徳天皇、神功皇后であり、大石町(旧・上村)の氏神である。

社殿の創建は古く、天正14年(1586年)の豊薩合戦の兵火で焼失したと言われている。その後、江戸時代の正保4年(1647年)に再建とされている。

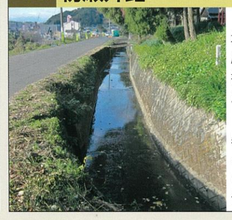
44 西福寺



真宗大谷派の白龍山西福寺は、慶安5年(1652年)穴亥和尚が光西寺分院として開基したと伝えられている。穴亥和尚は尼ケ瀬村長峰氏の出自であると言う。文久2年(1862年)の大洪水で庫裏などを流出し記録などもなくなったが、本堂、山門、鐘楼は災を逃れた。

お寺の前の道で「盆綱引き」が行われていた。「尼ケ瀬村」対「よその村」に別れて引き合い、尼ケ瀬村が勝つまで続けたそうです。

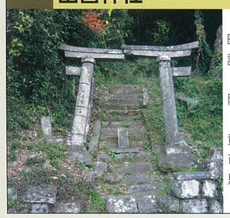
45 初瀬井路



戦国時代の末から江戸時代始めに築造された市域では最も大きな規模の井路である。その流路は庄内から、狭間・賀来・南大分を経て上野丘丘陵の裾を巡り、さらに志手から生石にかけての地域に及ぶ。かつての配水面積は390ヘクタールに達する。

狭間から賀来にかけての井路を通す際、狭間の黒川を渡す持土手が何度も決壊した。そこで「お初」と言う娘を人柱にしたところ持土手は崩れなかったという。この伝承は「初瀬井路」の名称となって今に伝えられている。

46 田営神社



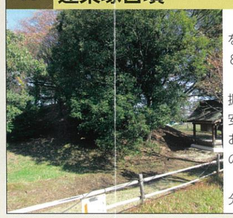
江戸期に入った元和3年(1617年)、肥後領篠原(狭間町篠原)の大将軍神社の分院として勧請された牛馬の守護神である。寛永9年(1632年)頃神殿を造営したという。

江戸時代は「大将軍深河内神社」と呼ばれ、明治以降、現在の社名の「田営(たづくり)神社」となる。

江戸時代から近年にかけて、同社は近郷の南大分、賀来、稙田の農民らに尊崇され、祭日には盛大な牛馬市が開かれたという。この牛馬市の場所が後に賀来競馬場となり、草競馬で賑わった。

なお、田営神社周辺の小丘は円墳と思われる。

47 蓬莱塚古墳

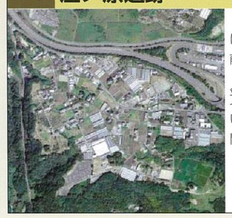


庄ノ原台地の中央に位置し、全長60メートルを超す。また周濠が巡っており、これを入れると80メートルに及ぶ。

径およそ35メートルに及ぶ後円部の頂には盗掘の跡がある。主体部は組み合わせ式の石棺で、安山岩系と言われている。埴輪などは収集されておらず直接年代を決定する材料はないが、4世紀のものと考えられている。

前方後円部と周溝が美しい姿で残っており、大分平野で最大規模の古墳である。

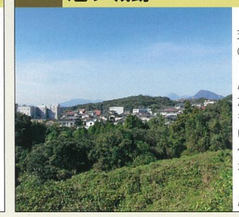
48 庄ノ原遺跡



高崎山から東に延びる庄ノ原台地の西南端部に位置する遺跡で、旧石器時代、縄文時代早期・前期遺物が出土している。

縄文時代早期土器には山形文、楕円押型文、無文土器などがあり、他に拳大の焼礫も発見されている。この焼礫などは他の例から見て集石遺構に関係するものと考えられている。

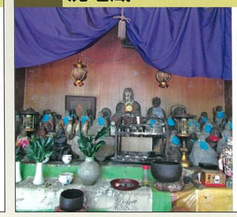
49 尼ヶ城跡



地元の人たちの言い伝えによれば、平安時代末期、都を追われた鎮西八郎源為朝が、稙田の庄の雄城(現在の雄城台高校のある所)の城に居住していた。尼ヶ城はこの雄城の城から大分川を挟んだ対岸の丘陵にあり、為朝にゆかりのある尼公が住んでいた城という。この女性は為朝の母親とも言われているが、詳細は不明である。二人は互いに行き来していたが、この女性が川を渡る際、休憩した場所が現在の尼ケ瀬の名の由来といわれている。

また、女性が腰掛けて休んだといわれる石が、尼ケ瀬の秦家の庭に残っている。

50 疣地蔵



江戸時代のこと、村人が石の地蔵さまを祀った。すると、参拝者の疣がころりと落ちたり、馬とともに参拝した府内藩主が地蔵さまに参ると、馬の疣が消えていったと言う話が広まった。その後この延命地蔵を疣地蔵というようになり、近年まで疣落としのご利益がある地蔵さまとして知られ、多くの人々がお参りするようになったという。